

珠心・アム



牧野寺ケンタ

art: まきしむ

前回までのあらすじ

おれ、山形圭吾と碓貞美は、学年一の美少女にして変人の月野真琴に導かれ、火星からの侵略者・オレンジと戦うハメになった。始めは動物にだけ寄生していたオレンジだったが、遂にその侵略は人間にまで及び、おれの両親も餌食になってしまふ。

必死の思いで碓と合流したおれは、寄生されたクラスメイトたちに襲撃されるが、何者かに拉致された月野にケータイから助言を得、なんとかこれを殲滅する。

この戦闘で瀕死の重傷を負った碓を背負い、月野が拉致されたという潰れたラブホへ向かうと、そこに待っていたのはかつての幼馴染み、射手谷麻弓率いるチーム・クラリオンという名の同業者たちだった。

彼らはおれたちに再会の余韻を与える間もなく「碓を始末する」と言い放つ。射手谷は碓の体内にオレンジが潜伏しているというのだ。おれは必死の思いで阻止しようとするが、その時、室内に異変が起こる。突如発生した巨大な地震が建物を襲い、おれたちは闇の中へとその身を躍らせたのだった……。

Part V

マイ・フレンド

1

意識と肉体が暗闇の中に落ちて、どれくらい経ったのだろう？

おれは砂利を踏みつけたような音で目を覚ました。

それは、正確にはラブホの残りカスが踏み砕かれる音で、もうもうと立つ埃の中で視界は最悪だが、おれの他にも生存者がいることを示していた。

おれはゆっくりと立ち上がり、むせ返るほどの埃を手で払いながら、まずは自分が五体満足であることを確認した。

「月野……月野か？」

おれは音のする方へ問い掛けた。

「圭吾か？ 生きてたんだな」

ひどく平淡なその声が誰のものであるか、おれは知っていた。

「碓……？」

おれは瓦礫の中へ一歩、踏み出す。

相変わらず視界は悪い。

異常なほどに濃い埃だ。

「圭吾、こっちだ」

碓の声に誘われるまま、足元に注意を払いつつ、おれは進ん

だ。

「月野は？ クラリオンの連中はどうした？」

その問いには答えず、代わりに「圭吾、こっちだ」と先ほどと同じセリフが返ってきた。

何か、変だった。

だってもうかなり歩いているはずなのに、瓦礫が途切れることなく、視界も全く晴れないのだ。

「碓、どこだ？ ここはどこなんだ!？」

その時、埃の中から異形の物体が飛び出してきた。

それはおれの首をガツチリ掴んで、強い力で締め上げた。

それは、手から肘に掛けての「腕」だった。

しかし一目見ただけではそれが腕だなんて見当もつかなくらいに変形していた。

何本も「角」のようなものが不規則に生えていたし、緑色の血管が浮き出、皮膚も赤黒く変色している。

「山形圭吾……」

腕の向こうから声が聞こえた。

碓の声だった。

埃が急速に晴れていった。

腕の持ち主の顔が明らかになった。

顔に何本もミミズバレのような血管を浮かべ、白濁した両目の下に引きつった笑みを浮かべているのは、間違いなくあの碓貞美だった。

「うわあああああつ!!」

おれは恐怖と悲しみのあまり、叫びながら暴れまくる。

しかし万力のように締め付ける手の握力は強まる一方で、おれの意識を遠のかせる。

「ぐええ……?」

意識を失いかけた時、不意に腕の力が弱まった。

おれは残った力を振り絞って手足をバタつかせ、やっと碓の手から解放された。

思わずよろめいて倒れ込む。

するとナニカが手に触れた。

「ひっ」

それは髪だった。

正確には長い、女と思しき髪の毛の先端。

髪の前には頭部があり、頭部の下にあるはずの身体は、なかった。

「嘘だ」

しかもそれは。

「嘘だあつ」

女の顔は。

「月、野」

虚ろな目。

様々な器官が肉や血と共に剥き出しになった切断面。それだけではなかった。

その近くには幼馴染の射手谷と思しき上半身が転がっていた。他にも関西弁の丈や、スキンヘッドの柿原ほかチーム・クラリオンの面々も、四肢や臓物を飛散させて無残な骸と化し、そこからじゆうにばら撒かれていた。

みんな、しんだ。

おれは呆然としたまま思考する。

ころしたのは？

視線を上げる。

そこには薄笑いを浮かべる礎の姿。

コロシタノハ、コイツダ。

おれの中に突如として、激しい怒りの感情が沸き上がる。

「うがあああああっ」

咆哮を上げ。

「うううううっ」

一瞬にして立ち上がり。

「ぎいいいいいっ」

拳を作り、思い切り弓なりに引いて。

『ヤメナサイ!!』

その声は耳ではなく直接、頭蓋骨に響いてきた。

「ううっ!？」

思わず放たれかけた拳に急ブレーキを掛ける。

『騙サレテハダメ。目ヲ覚マスノツ』

直後、視界が渦に呑まれた。



全てがぐにやぐにやに歪んで、今まで見ていたものが暗闇に覆われてゆく。

暗闇はやがておれ自身をも飲み込んだ。

全てを無に返すように。

そこに不思議と、恐怖はなかった。

2

目が覚めた。

ゆっくりと目を開けると、薄暗い室内に蝋燭の炎が揺らいでいる。

ここは？

そう廃墟と化したラブホ「スウィート・ゼリー」の一室。

69号室という名のSM部屋。

なぜ？

何故、部屋はどこも壊れてないのか？

何故、おれは突っ立っているのか？

何故、目の前に月野がいるのか？

何故、射手谷の泣き声が聴こえるのか——？

「目が覚めた？」

月野が、冷淡な口調で言った。

「つ、き、の？ あれ、なんで？」

「危なかったわよ山形君」

様々な意味合いが含まれた“なんで”に半ば被さる様に月野は続ける。

「あなたと丈——ちゃんは死にかけたの。いえ、正確には“互いを殺し合う寸”だった」

関西弁を丈ちゃんと月野は躊躇いがちに呼称した。いや、そんなことより。

「どういう、ことなんだ？」

「“精神占領”よ。この場にいた皆は、同時に高濃度の宇宙電波によって思考を乗っ取られたの。嫌なものを見た、でしょ？」

崩れ去る足場、埃舞う瓦礫、そして、異形と化した碇。

みんなの、死体。

おれは一瞬、頭に鋭い痛みを感じて顔を歪めた。

しかし、月野はそんなおれを気遣ったりはしない。

「二人、死んだわ」

「え？」

思わず耳を疑った。

しかし、これで絶えず聴こえている射手谷の泣き声の意味が分かった。

おれはふらつく足取りで泣き声のする方へ歩みを進めた。

さほど広くはない室内、その隅に、チーム・クラリオンの面々が立ち尽くしていた。

ドレッド・ヘアーに紫のパーカーの丈、その横には黒のノー

スリーブの巨漢、柿原だ。

その横には白髪短髪でオネエっぽい宮田が、泣き続ける射手谷の背中をさすっている。

この場にはいないのが、犠牲者。

オレはゆっくと割り込む形で彼らが困むモノの姿を見た。

「ううっ!？」

思わず呻きが漏れた。そこには頭部の原型を無くした二体の死骸——こう表現するしかない——が寝かされていた。

一体は長身で藍色のジージャンにジーパン、もう一体は小柄で黄色いスポーツウエアの上下、その傍らには深緑色のキャップが哀れむようにポツンと置かれている。

顔は——分からない。

どんな力で殴ればこうなるのだろう。

肉は潰れ、骨はへこみ、眼球は飛び出し、思い切り顔全体を圧縮して更にねじったみたいなのに、ともかく原型を留めていない。

変形のわりに血は出ていないが、それでも鉄臭さと、ナニカが焦げたような異臭が鼻をついた。

それより、この二体は、二人は。

高山卓哉。

葛西辰夫。

そう見て、ほぼ間違いない。

「氣いついたんかいな」

弱々しい声で丈が言った。

そしておれが丈の方を向いた次の瞬間。

おれは顔面に焦げ付くような熱と痛みを同時に浴びせられて後ろに吹き飛んだ。

後頭部を壁にしたたかに打ち付けられて、初めて自分が殴られたのだと悟った。

「な、にを……」

そう言うのが精一杯だった。

「一応な。殴っとかんとボクらの気が済まん。どや？ 熱うて痛いやる？ それでボクらの力は三分の一も使うとらん。もし全力でやったら、あなつとる」

言い捨てて丈は親指で高山と葛西の死体を示した。

「自覚せえよ。半分以上は自分の責任やで」

「い、一体、何が」

「まだ分からんのかいな。この場に誰がおらん？ しつかり見晒せ」

ようやく覚醒しだした頭で改めて現状を確認する。

月野、射手谷、丈、柿原、宮田……ああ。

「……碇」

「そや。君のお友達がおれへん。マインド・ジャックはお友達の仕事や。ボクらがちんたらやつとつたお陰で目覚めてしもたんや」

ここで丈はもう一度、言葉を切った。

「オレンジが、な」

何てことだ。

碓が、消えた。

あの夢みたいに、化け物になって……？

「なんで、逃げたのかしら？」

さっきまで黙っていた月野が突然会話に割って入った。

「不思議よね。本当に覚醒したなら、まずスキだらけの私たちを皆殺しにしてから部屋を出てもいいはずなのに。あんなまどろっこしい攻撃をして来るなんて、変よ」

「そら、ボクにも分からん」

「覚醒したてで、まだオレンジが身体に馴染んでないんじゃないかな？」

そう言ったのは射手谷の背中をさすっていた宮田だ。

射手谷も落ち着いたのか、腫れぼったい目をしてこの会話を懸命に聴いている。

「でも、それにしてもはマインド・ジャックは高等技術よ。そこ

ら辺のオレンジに出来る芸当じゃ、ないわ」

「何が言いたいねん」

「もしかしら、まだ碓君の自我が残っているのかも……」

「アホぬかせ！」

丈が感情に任せて壁を拳で思い切り叩いた。

埃がかすかに舞い、蠟燭の炎が揺れる。

「結果的に二人も殺しとして、自我もクソもあるかい！」

「でも……」

蚊の鳴くような声で口を開いたのは射手谷だった。

「あたし、まるでオレンジの気配を、感じなかったの。あんな状況でも、常に気を配っていたから、気付かないはずは、ないんだけど」

時々しゃくり上げながら言う射手谷に、場は静まり返った。

「とにかく、や」

丈が低いトーンで静寂を破る。

「碓を追うで。何時までもここにおっても埒が開かん」

「でも、どうやって？ オレンジの気配を追うわけにもいかないのよ？」

そう言ったのは月野だ。

「妙案があんのか？」

「いいえ」

「はん、ハッキリ言うのお、何もなければ黙って」

「気配」

突然、張り詰めた声が射手谷の口から漏れた。

「どうしたの麻弓ちゃん？」

少し困ったように身をくねらせつつ、宮田が言う。

その横で、射手谷はじっと唯一の出入り口である扉を凝視していた。

「オレンジの、気配がする」

「私も」

月野が片手を挙げて同意を表す。

「いつからや」

「今、しかも……」

「一匹やそこらじゃない……」

「大群ね」

「でも、どこに……」

存在が消えかけていたおれも、やつと一言だけ発する。

「この一番下」

この射手谷と月野からほぼ同時にハモるようにして発せられた言葉が、合図だった。

「戦闘準備！」

「はっ！」

「はっ！」

丈の号令に二人になってしまったチーム・クラリオンの戦士は答える。

そして素早い身のこなしでさっさと部屋から出て行った。

隣の部屋が開け閉めされる音が聞こえ、一分もしない内に、

二人は戻ってきた。

手にはそれぞれ鉄で出来たと思しき「棒」を何本も持っている。

どこかで見覚えがあるなど思ったら、これは工事現場によくあるコンクリートの補強などに使われている鉄棒だ。

しかしこれが武器なのだろうか？

「おい山形くん。今、こんなちやちな武器」て思たやろ？」

「お、思ってたねえよ」

心が半分読まれたみたいで気持ちが悪かった。

「はん、まあええよ。見とったら分かるさかい」

丈はそう言う自身も鉄棒を数本受け取って束にした。

「ふうふうふうふう」

腹の底から発せられる低い呼吸。

それは丈、柿原、宮田の三人から同時に発せられている。

よく見ると、その右手が内側から発光していた。

そこは「マンデルブルット図形」と呼ばれる小難しい力の源の痣がある場所だった。

三人の右手が赤く、燃えるように光っている。

「儀式」は一分くらい続き、三人の持つ鉄棒に異変が起きた。

まず右手の赤が鉄棒に移る。それは徐々に鉄棒を侵食し、あつという間に鉄棒はライトセイバーみたいな光の棒になった。

次に光る棒はぐにやぐにやと変形を始める。

まるで鉛細工。いや、意思を持つ無数の蛇のように、のたうち、絡まり、細く、或いは太く、体積を面積を自在に変えてゆく。

その驚くべきイリュージョンが三分は続いただろうか。

赤い光が収まる頃、三人の手にはそれぞれ見たこともない武器が握られていた。

丈が担ぐそれは一見、巨大な「鎌」であった。

しかし通常の鎌とは異なり、まるでUFOキャッチャーの四

本足のクレーンアームをそのまま刃に取り替えたような奇抜な形態をしていた。

柿原が両手で握り締めるのは一見、巨大な「ハンマー」だった。

しかしこれも通常では見られない細工が施してある。本来なら平らであるはずの先端はわざと歪に作られており、明らかに敵をより原型を留めず、骨と肉の混じったミンチにする為に産み出されたのだと分かる。

宮田の片手に提げられているのは一見、細身の「剣」だった。

しかしその刀身は異常な柔軟性を持ち、しかもかなりの長さだ。その為、刀身の三分の二が絨毯の上でぐるぐるを巻いていた。

三つの武器はどれも黒光りし、相当な重量と強靭さを伺わせただ。

おれはそれらの武器製造が行われている間、ただ呆けたように三人の手元に見入っていた。

「どや。たまげたか？」

得意そうな丈におれはただ頷くことしか出来ない。

「あたしたちの力は主に痣のある掌から『高熱』を発するの。

その温度は最大で鉄を溶かすほどにまで上げることが出来るわ。

これはその応用ね」

ふと見るといつの間にか射手谷の手にも、短剣のような武器が握られていた。

他にも二つ、似たようなものがある。

「はい、二人にも。あたしの有り合わせだけど、ないよりマシよ？」

そう言って二つの短剣をおれと月野に差し出す。

「ありがとう」

「どうも」

おれは半笑い、月野は無愛想にそれぞれ武器を受け取った。

三人のと同様に黒光りするそれは、よく見ると刃がドリルのような螺旋になっており、しかも螺旋を構成する全ての渦が切れ味鋭そうに研ぎ澄まされている。

「さ、行くわよ。いつまでもここにはいられない」

「オウ」

おれと月野を除く三人が同時に返事をした。

そして彼らは足早に部屋を出て行く。

死んだ二人の仲間に一瞥くれたのは、射手谷だけだった。

おれは月野の顔を見た。正直付いて行くべきか、まだ少し迷いがあったのだ。

「私たちも、行きましょう」

月野は屹然とした調子で言うのと彼らの後を追って歩いていく。

「待って！」

おれは咄嗟に彼女の手を取った。

理由はおれ自身にもよく分からない。

「何？」

当然の如く、不機嫌そうな反応。

「おれ……」

何を言う気なのか。おれ自身分かっていない。

「だから何？」

「おれ、月野のこと守るから！ 何があっても絶対にっ！」

なんじゃそら。

おれはこんなことを言いたかったのか？

あまりに場違いでこつ恥ずかしいセリフに、顔が熱くなる。

「そう……」

月野の反応は氷のように冷たい。

耐え切れずに俯き、次に顔を上げた時、目の前には予想だにしない月野の表情があった。

それは笑顔だった。

いつの日か、あの裏山で見たような、眩しくて胸の詰まる、

笑顔。

「約束、だからね」

そう言つて上目遣いにおれを見る。

なんかラブコメ臭い。

「ん、ああ」

正視出来ずに目をそらしながら、おれは言った。

ますます臭い。

「じゃ、いこつか」

「ああ」

おれと月野は手を繋いだまま廊下へ飛び出し、チーム・クラ

リオンの後を追う。

この手の温もりが今、信じられる唯一のものであると、おれは感じた。

3

おれと月野が彼らに追いついたのと、ヤツらとの交戦が始まったのは、ほぼ同時だった。

ラブホ、スウィートゼリーは三階建てで、おれたちのいた69号室は中でも一番端に近い部屋である。

おれたちが全力で走っても、下に居たオレンジの大群が上まで登ってくるスピードを考えれば、途中で遭遇することは容易に想像できる。

ここは丁度この建物の中間地点。つまり二階の廊下だった。

「ぐええええっ!!」

「じゃあああっ!!」

相変わらずオレンジに寄生された人間の口からは、意味不明の奇声が漏れている。

数はざっと見ても十体以上。

しかしおれがその時気になったのは、奴らの数より姿の「異常さ」だった。

ある者は腕が大きく膨らみ、ある者は爪が身長半分以上も

長い。

まるでおれと碓が裏山で葬って来た動物たちみたいに、変形した人体に、まず慄いた。

同時に、さつき見た夢の中の碓の姿も重なる。

「ううっ」

思わず目眩がして壁にもたれ掛かる。

そんなおれを月野は「しつかり！」と叱咤して手を強く引いた。

おれの目の前にはオレンジの群れに立ち向かってゆく三人の姿。

丈、柿原、宮田。

彼らの戦法は思わず見惚れてしまうほど、美しく連携の取れたものだった。

まず、宮田が鞭状の長剣を放ち、ヤツらの足を薙ぐ。

次に倒れたヤツらを、丈が四方に刃の付いた変形鎌で首を刈り取る。

刈り取られた首は血の糸を曳いて後方の柿原へと投げられる。

最後に柿原が頭部——つまりオレンジの本体がいる急所を無骨なハンマーでグチャグチャに叩き潰す。

実に効率的にオレンジが始末されてゆく。

慣れている。

まるで廊下がおレンジの屠殺場のように見えてくる。

しかも彼らは掠り傷の一つも負っていない。

ただ、ヤツらの返り血で、その身体はまるでスプラッタ映画を体現して見せたような禍々しさだった。

ざくつ

薙ぐ。

がきゅつ

もぎ取る。

ごちゅつ

潰す。

ざくつ

がきゅつ

ごちゅつ

ざくつ

がきゅつ

ごちゅつ

……このエンドレス。

レンガ色のカーペットにいくつもどす黒く染みを作り。

首のない身体と、髪と肉片と血と骨が混じった頭部の残骸が

山と積まれていく。

この戦いという名の「流れ作業」におれの入る隙など皆無に

等しく、それは安堵と同時にこの上ない無力感をおれに味あわ

せた。

しかし、彼らの「慣れ」は思わぬイレギュラーを産む。

それは同時に、オレンジが学習する高等な生物であるという認識を、再度おれたちに植え付けることになる。

宮田が何度目かの長剣による足払いを放つ。

しかし足首を薙ぎ払って戻ってくるはずの剣は何故か途中で止まってしまった。

原因はヤツらの内の一体——白髪混じりの大柄でがっちりした初老の男が、宮田の剣を踏んでいたからだ。まぐれか、狙ったものかは定かではないが、結果的に宮田の動きは止まった。それは時間にして僅か一秒程度。

しかし僅か一秒は、致命的な一秒となる。

宮田の剣に、一瞬にして大勢のオレンジが群がる。

そして初老の男がやったように、床に伸びる長剣を体重を掛けて踏み出した。

大人、子供、男、女、オレンジに寄生された大小様々な人間の途方もない重量が剣に掛かる。

それは剣を破壊することは叶わなくとも、武器としての意味をなくすには十分だった。

「しまっ……っっ」

宮田の叫びは途中で、自身からほとばしる鮮血と共に掻き消えた。

長い爪を生やした十代半ば頃のパジャマ姿の少女が、血飛沫の中から躍り出る。

「宮田あつ！」

丈は金切り声を上げ、変形鎌を振りぬく。

少女は背中から壁に叩きつけられ、返す刀の追撃で首が胴から離れる。

後は柿原がいつものように頭を叩き潰した。

「ぬおおおっ!!」

二人はフォーメーションを大きく乱し、宮田救出のため最前線へと駆け寄った。

その間、襲い来るオレンジを変形鎌とハンマーがお互い相打ちスレスレのところまで交錯しながら、次々と打ち倒していく。

しかし、完璧な連携が崩れた今、全てを「確実に処理」することは不可能だった。

宮田を庇うように繰り出される攻撃の隙間を縫って、数体のオレンジがおれたち後方組の方へとこぼれ出た。

ある者は手傷を負い、凶暴さを増したようにも見える。

血走った目を見開き、獣のような唸り声と共に突撃——。

おれは一瞬で「感覚の渦」を呼び起こす。

今、二人の少女を守るのには、おれしかない。

ヤツらとの距離は一瞬で詰まる。

おれは月野の手からドリルナイフを引つ手繰ると咄嗟に二刀流で構えた。

一人は——サラリーマン風。

一人は——主婦だろう。

一人は——モヒカンパンクス。

三方から一斉に飛び掛ってくる。

武器は鋭い猛禽のような爪。

おれは素早く前に出た。

そして真ん中にいた主婦の身体に肩口をぶつける。

全身を使って跳ね上げると主婦は天井にぶつかって、脆くな

っていたパネルの一部と共に落ちてきた。

次に胸の前で交差するように引き付けておいた両手の得物を

開放し、左右の敵に一発ずつ浴びせて叩き落とす。

しかし当然、息の根は止まっていな

起き上がろうとしていた主婦の後頭部にドリルナイフを突き

立てる。

面白いことにこのナイフは、おれが覚醒した直後に回転を始

めていた。

切っ先は頭部をスポンジの如く抉り、手応えで貫通したこと

を悟った。

鮮血と肉片を盛大に飛び散らせてナイフを引き抜くと、新た

に構え直した。

「あと、二匹」

おれは自分でも知らず知らずのうちに引き攣るような笑いを

浮かべていた。

サラリーマン風とモヒカンパンクスはほぼ同時に起き上がる

と距離を取り、低く構えた。

その顔は先程の一撃で肉が抉れ、酷い有様だ。

低く、四足獣のような体勢から同時に仕掛ける。

リーマン風は高く、パンクスは低空飛行の突撃。

おれは半身に構えて待ち受け、タイムリングを見て、飛ぶ。

ナイフを一本逆手に持って、丁度全身で空中に円を描くよう

に舞った。

結果は打ち落とされたリーマン風と、頭部を更に抉られたパ

ンクスを見れば明らかだ。

着地と同時に再度、飛翔。

リーマン風は傷が浅かったと見え、猫並みの俊敏さで早くも

爪をふりかぶつての二撃目を放っていた。

その顔を、おれがドロップキックで打ち抜く。

キレイに全身を伸ばした完璧な一撃。直後に身体を一回転さ

せて両手からパンクスの上に着地する。その両手の先には、ド

リルナイフ。

崩れかかったパンクスの頭部が更にモヒカンごと原型を留め

ず破壊される。

ナイフが地面に達すると同時に、倒立状態のおれは体重を手

前に掛けてカーペットの上に降り立つ。

目の前には、よろめきながらもこちらに向かってくるリーマ

ン風の姿があった。

その顔は大きく凹み、顎もだらりと下がって会話はもう不可

能と思われた。

しかしヤツの口からは、呼吸とは異なる声が漏れてきたので

ある。

「ぐぐぐ、きいざあ、まああらも、おぢばいだあ、おでだち
どおお、おだじだあああ」

聞き取りづらく意味もよく分からなかったが、おれたち
がお終い” ってとこだけは分かった。

おれは野球のピッチャーのように全身を使って大きく振
りかぶり、右手のドリルナイフを投擲した。

その狙いは見事に当たり、ナイフはリーマン風の眉間を貫
いた。

これでのオレンジも間違いなくお陀仏だ。

「お終いなのはオマエらだろ？」

おれは込み上げる笑いを隠さずに言った。

仰向けに倒れる奴を見ずに、ふと気になって背後の少女二人
を振り返る。

おれを見る二人の表情は、くつきりと分かれていた。

恍惚にも似た満足そうな顔で見つめる月野と、恐れを剥き出
しに、化け物でも見るような目で見る射手谷。

おれは両者の表情を二つの目でゆつくりと睨め回し、味わい、
咀嚼した。そして改めてチッククのような笑みを浮かべる。

「二人とも、ここで見てろ。もつつつと血が見れるぞ」

自分でも驚くようなことを言い、おれは丈と柿原が必死の攻
防を繰り広げる前線に飛び出した。勿論、途中でもう一本のド
リルナイフを回収するの忘れずに。

二人は手傷を負いながらも決して怯むことなく、オレンジの
大群を蹴散らしていた。

丈の背後に迫っていた一匹におれがドリルナイフを後頭部か
ら突き刺し、そのまま上に斬り上げて頭を二つに割った時、よ
うやく丈はおれの存在に気が付いた。

「おー、なんや助太刀か。頼んだ覚えはないでえ」

血まみれで肩で息をしながらも、大口を叩く。

「おれも頼まれた覚えは無い」

勤めて冷静に言い返しながらか、更に数匹ぶちのめす。

「はは、頼もしなあ。麻弓の目に狂いはなかったか」

「無駄口はいい。さつさと片付けるぞ」

「人が変わったみたいやな……。柿原！ 宮田を後ろへ！ 手
当てしたつてや！」

丈が叫ぶと柿原はハンマーをハエ叩きみたいに軽々と振り回
しながら倒れ込む宮田を抱き抱え、月野と射手谷のいる廊下の
奥へと走っていった。

「山形くん、勘はええ方か？」

「そっちこそ、相打ちはごめんだぜ」

「ははは、言うやん。なんや楽しんできてきたなあ」

丈は血でぬめる手をパーカーに擦り付けて構えなおす。

おれはより近距離での戦闘に備えてドリルナイフを二本とも
逆手持ちに変えた。

数瞬後の廊下に響くのは、おれたちの喚声とオレンジの断末魔。

それを想像するだけで肌が粟立つ。

おれの気分はサイコーにハイになっていた。

4

ガランと大袈裟な音を立てて、血肉にまみれた武器が四つ、斑模様のカーパーペットのの上に転がった。

それらは曲がったり欠けたり折れたりして、もうとても使いようの無い代物。

正確には瞬く間に使い古された鉄製の刃物と鈍器だった。

「あくあ、もうどれも使えんなあ。また作り直しや」

ラブホの廊下に累々たる屍の山を築いた者たちの一人である丈は、軽く伸びをして面倒くさそうに言った。

彼の身体は余すところなく血にまみれている。

それは柿原もおれも同じで、三人ともさすがに少々疲れていた。

殺したオレンジの数は百近かった。しかし正確な数を数えているわけではない。

とにかく我武者羅に殺しまくった。

少し離れたところで、射手谷と月野の看病を受けた宮田が横

たわっている。

胸を斜めに深く切り裂かれた彼は、今も包帯から血を滲ませ、苦しそうだ。

そんな姿をふと見て、少し前のおれならどんな傷でも全部無かったことになってたんだよな。なんてことを思った。

気分は、先程から一転して落ち着いている。

「おーっしや、ほんなら『取り調べ』始めよか」

丈がそう言って数回、拍手を打った。

その足元には両手足のないヤツらの生き残りが鬼のような形相でこちらを睨んでいる。

おれが最後の一体に止めを刺そうとした時、丈が一体だけ、動けなくして残すように指図したのだ。

理由は大方察しがついていた。

「よ。喋れるよな？」

聞かれた生き残り——外見はロン毛の青年——は始め、ただ獣のように唸っているだけだった。しかし、丈が再度「喋れるよな？」と凄みを利かせると、一度だけ領いた。

「よし。ほんなら聴くで。碓真美はどこ行った？」

この問いにロン毛は掠れた声で

「知ら、ナ、イ」

とだけ言った。

するとすぐさま丈の蹴りが飛んだ。腹部を蹴られてロン毛は呻く。

「嘘つけ。そんならなんでこのタイミングで攻めてきよったんじゃ。あいつがすぐにサインを送ったからやろが」

「ホントニ、知らない」

再度、丈の蹴りが飛ぶ。一発、二発。

「次、しらばつくれたら三発やぞ」

「……モウ、終わりなんダ」

丈は思い切り脅したが、ロン毛の零した言葉は質問の回答ではなかった。

「そや。お前らは遅かれ早かれ終わりや。ボくらが皆殺しにするさかいな」

丈は苛立ちを隠さずに言った。

そしてまたも足を振り上げた時、射手谷が叫んだ。

「止めて！ 変よ！ ナニか変！」

皆が一斉に彼女を見る。射手谷は青ざめた顔で窓の外を指差していた。

おれはふと気になった。あのリーマンが死ぬ前に言っていた言葉を。

あいつは何て言ったんだっけ？

確か、今のロン毛と似たようなことを、言っていた気が……。

しかし覚醒状態の時の記憶はひどく曖昧で、上手く思い出せなかった。

宮田を除く全員が窓に駆け寄って外を見ていた。

おれも一拍遅れて外を覗く。

ここは二階。ある程度の距離なら見渡せる高さだ。

「なつつつ!？」

おれは声を失った。

「なんや、アレは」

「母、船？」

「あんなの、初めて、見た」

「何が起きているの？」

皆、次々と驚きの声を漏らす。

おれたちの視線の先にあるもの、それは、空いっぱいにはびらいた巨大な円盤だった……。

「UFOの種類？」

晴れた日の放課後、碇と共に自転車を漕ぎながらこんな会話をした。

「そっ、どれくらいあるものなのかと思ってさ」

あの頃の碇はおれともすっかり打ち解けて、休みの日もしょっちゅう会っていた。

「やっぱり有名なのは『アダムスキー型』だね。ホラ、あの茶碗を引つ繰り返したみたいなヤツ。あとはアーノルド事件の『フライング・ソーサー』とか……見たまんまのフリスビーみたいな円盤や、葉巻型、コマ型、長方形に三角形、魚雷型……は、多い？ いろいろあるんだよ。ここまではエイリアン・クラフト——宇宙人の乗り物——としてのUFOだね。第二次大

戦中に多数目撃例のある「フーフアイター」ってゆう幽霊戦闘機も、一応UFOの部類に入る。あとナチスの「V-7計画」、米軍の「アブロカー」、ロシア製の「エキップ」これらは人工のUFOだ。どれも開発に成功したとは言いがたいけど。それに最近じゃUFC——未確認飛行生物——なんていうジャンルもある。空飛ぶ人間に馬、なんかわからない糸状の生物や、少し前にガセだって分かった「スカイ・フィッシュ」もこの部類に入るね。とにかくこういう話は掘り下げだしたらキリがないんだ。今度、写真でも見ながらまたじっくりと……」

「いや碓、ごちそうさま。もう腹いっぱいだよ」

今、眼前に拵がるUFOは、一体何型なのか？
おれは呆然とする一方で、そんな呑気なことを考えていた。
実際、大きすぎて正確な形は把握できない。強いて言うなら
フリスビーのような真ん丸い円盤。だろうか。

UFOの所々からは赤いライトが明滅しており、中心にある
一際大きな白いサーチライトは地上に向けて円を描くように照
射されていた。

「あれはなんや!? あれはあつ!?」

ガツンと鈍い音がして、見ると丈が手足の無いロン毛の胸倉
を掴んで揺さぶっていた。

「マザー……シップ」

つまりは母船。

「そのマザーが、何しに来とんねん!」

「我々ヲ……迎えに、来たのダ」

「はあ?」

「我々は、この地球を、去ル」

「何でやねん!!」

丈の発したツツコミは、漫才では出せない迫力があつた。

「ヤツら」が、来たからダ。我々ヲ、追つてキタ」

「ヤツらつて誰や?」

「スィーパー」我々は、そう、呼んでイル。この地球に来ル

途中、見つかつてしまつた。宇宙警察傘下の特殊部隊……銀河

系に害ヲ為すト判断した生物を、根絶やしニ……」

「何を言つてるんだコイツは」

オレは思わず呟いた。

スィーパーに宇宙警察、初耳な単語が並んでいる。

「おい麻弓! 知つとつたんか?」

気が立っている丈が荒い口調で問いたてる。

「あたしは、知らない。何も、聴いてない」

そう言つて首を振る射手谷の青い顔に、嘘はなさそうだった。

「月野ちゃんも、知らんな?」

隣にいた月野にも、ついとばかりに振られる。

「知らない。でも、宇宙警察にスィーパーつてヤバイ連中が
いることは知つてる……皆は知らなかったの?」

月野は意外とばかりに目を剥いている。

「知るかいな。ボクはオレンジのこと以外、なんも知らんわ」
 丈が半ばなげやりな口調で言う。

「つまりオレンジ共は逃げ帰る、と。じゃあ何でお前らは、わざわざここに攻めて来たんだ？ 侵略を諦めたのに？」

オレは内心かなり動揺していたが、努めて冷静を装っていた。今が、とても貴重な時間に思えたからだ。

「マザー・シップニ乗れるのハ、選ばれた個体ノミ、オレを含ム、大勢はここに残らザルを得ない。ダカラ、出来ることを、やろうとシタ、だけダ。憎い仲間の敵ヲ、討とうトナ」

そう吐き捨てるとロン毛はオレたちを睨みつけた。

「つまり、オレンジの選ばれたヤツ以外の残党は、腹括っておれたち宇宙戦士を急襲してらつてわけだ」

おれはロン毛の言っていたことを反芻しながらまとめた。そして月野に質問する。

「月野。宇宙警察についても少し詳しく教えてくれないか？」

月野は領くと学校の屋上の時みたいにトンデモないことを話し出した。

「宇宙警察はその名の通り、全宇宙を監視下に置く宇宙の法に置ける鉄壁の砦よ。でも膨張を続ける宇宙空間を全て取り締まるのは事実不可能に近いわ。だから膨大な数の支部を作つて銀河系に限らず配置しているの。でも各支部によって取り決めが違ふし、連絡の義務もないから実際は統一感がなくてそれぞれ

に行動理念を持つて活動してるのが現状ね。それに彼らは基本、惑星間の抗争や侵略行為には一切加担もしなければ止めもしない。ただ見てるだけなのよ」

「なんでや！ それやつたら宇宙警察はなんの為にあんなん！」

丈がオーバーアクションで憤る。

「彼らを守るのは『大きな意味での平和』なの。つまり宇宙の均衡が保たれるか否かが判断基準になるわけ。だから例えば地球が火星の侵略を受けても、宇宙全域に置いては問題なしと見たわけね」

「ふざけやがつて」

おれも思わず毒づく。

「そうね。でも、だから私たちがいるんじゃない。レティキュライやクラリオンは例え宇宙的に問題がなくても、一方的な惑星侵略を由としない。だから現地で宇宙戦士を育てて、立ち向かわせてるつてわけ」

「そんならスイーパーは？ そいつらも宇宙警察の傘下にあるんやろ？」

「さっきも言ったけど、宇宙警察は各支部によって全く異なるルールで動いているの。スイーパーはその中でも異質な部隊よ。支部として一箇所に留まることをせずに、銀河系を漂流しながら目に付いた不穏分子を抹殺して回っているの」

「不穏分子？」

「つまり、宇宙にとって有害と見なしたものを排除するわけ。判断基準は彼ら独特のものね」

オレたちの間に沈黙が訪れる。

それは少しの安堵感と奇妙なやるせなさを持って場を支配していた。

月野が言っていることは、要約すると、つまり。

「わたしたちはもう、お払い箱ってわけね」

そのセリフ——皆の心に少なからず去来していた想いを、口に出して顕現させたのは、射手谷だった。

「んなアホな……」

丈が気の抜けたような声を出す。

どんつと激しい音がして、見ると柿原が壁を力いっぱい殴りつけていた。

「……なら、おれたちのしてきたことは……無」

「無駄じゃ、ないわ、よ」

弱々しい声を発したのは、床に臥している宮田だった。

「私たちが、戦ったお陰で、守れた人だって……きつというわ。

それに、もし、そうじゃなかったって……私たちには……」

「戦うしかない」

言葉の続きを請け負う形で口にしたのは丈だ。

「ぼんくらやったボクらを、麻弓は、クラリオンは導いてくれた。生きる意味をくれた。それは戦うことで、地球を守るといいう大義の中で、ボクらは初めて自分の生を実感することができ

たんや。ボクらには戦うしかなかった。今更、悔やむことなんでない」

そう言い切ると、丈は麻弓へと視線を向けた。

「麻弓……あんたの憎い『仇』は、スイーパーに任せといたらええんとちゃうか？ ボクらはここまでや」

悔しさの交じった丈の言葉を、紙のような顔色の射手谷は黙って聴いていた。

「オマエら。結局は自分の都合ばかりだな」

と、先程から沈黙していたロン毛が口の端を吊り上げながら言った。

「オレたちオレンジが、何故、地球を侵略しようとしたのか、何故、住み慣れた火星を離れなければならなかつたのか、聴こうともシナイ。全て自己完結すれば満足か？ 愚かなニンゲンめ！」

そう吐き捨て、血と唾を撒き散らしながら喚く。

言われてみれば、おれたちはオレンジ側の情報を、戦闘に関して以外は何も耳にしていない。

「なんで」

おれが興味を持って口を開きかけたその時。

ぎゅるるるるるるるる

ぐちちちちちちちつ

突然、ドリル・ナイフが咆哮を上げて、ロン毛の頭部に突き刺さった。

ナイフは螺旋を描きながら、どんどんロン毛の頭にメリ込む。血と肉と骨と脳漿のうじょうをぶちまけて、今度はナイフが引き抜かれる。

そして再度、頭部に突き刺す。

ぐちちちちびちちっ

既に中のオレンジは死んでいるだろう。しかしナイフは止まらない。再度引き抜き、三発目がぶち込まれる。

ここまで来て、呆けていたおれはやっと正気に戻った。

そしてドリル・ナイフの持ち主に、ゆっくりと視線を合わす。

そこに、いたのは――。

「射手……谷」

射手谷麻弓は両手を真っ赤に染めて立っていた。

そのメガネ越しの目には狂気を孕はらんで、乾いた唇が突如、堰を切ったように言葉を紡ぐ。

「ふざけんじゃねえよこの、ドグサレがつつ」

そして四度目を突き刺す。

「お前らの言い分なんか聞く価値もねえんだよつつ」

五度目。

「母さんが消えたのはお前らの仕業だつつ」

六度目。

「父さんが自殺したのもお前らの仕業だつつ」

七度目。

「あたしが遠い親戚連中に虐めらまくったのもお前らの仕業だ

つつ」

八度目。

もはやロン毛の頭部は原型を留めていない。

肉と骨の残骸だ。

射手谷の赤白ボーターのトレーナーも、いつの間にか赤一色に変わっている。

九度目が振りかぶられた時、ようやく丈が背後から羽交い絞めで射手谷を押さえつける。

もつとも、身長差がかなりあるため、ほとんど覆い被さるようにして。

「離せえ！ 離せえっ！」

射手谷は子供がイヤイヤをするように身をよじる。

「離すかいボケツ!!」

丈が怒鳴る。しかし、射手谷はまるで鎮まらない。

「あたしは諦めない！ 絶対オレンジを滅ぼすんだ！ これは聖戦だ！ 生きるか死ぬしかないんだ！ 離せえっ！……お願い、離してよ……お願い」

最後はほとんど泣き声になっていた。

ふと横を見ると柿原も肩を震わせて泣いている。

宮田も、丈も泣いていた。

おれと月野を除く、チーム・クラリオンの面々は皆、射手谷のサイコな喚きに涙を流していた。

「ボクは……麻弓に付いていくで。理不尽でも、不可解でもえ

え。オレンジ通り越して、スイーパーとも一戦交えようつていうなら、喜んでやったるわ」

「おれもだ!!」

「私もよ!」

「ありがとう、ありがとう皆……」

どうやら射手谷の狂態は、彼らのハートを深く打ち抜いたらしい。

それはおれや月野のような部外者から見れば信じ難いことだが、おれは彼らの決心に異を唱えようとは思わなかった。いや、思えなかったのだ。

血と涙と鼻水と唾液で濡れる妙に湿っぽい廊下が、次の瞬間、激しい振動と爆音に揺れた。

窓から外を見るとオレンジのマザー・シップが大きく傾いている。

その背後にあるモノを垣間見た時、もうどんな事態が起きても決して怯むまいと誓っていたおれが、思わずたじろいだ。

そこにいつの間にか存在していたのは、巨大な母船より更に巨大な漆黒の巨人だった――。

5

大巨人――と形容したのだから当然、ソイツは人の形をして

いた。

しかしそれは「人」と呼ぶには明らかに「歪」だった。

その手足は巨大さの割には異様に細く、指などはまるで木の枝のように節くれ立っている。

顔も全体のバランスで見れば驚くほどに小さい。

十頭身以上はありそうだ。

しかし、何より奇妙だったのはソイツの姿が、まるで「霧」で覆われているかのように瞭然としないことだった。

何度、目を凝らしても漠然とした黒い巨人としか映らない。すぐ側のマザー・シップは細部まで見渡せるのに、巨人だけは蜃気楼の中にいるようにボヤけている。

マザー・シップが傾いているのは、巨人の攻撃が原因だろう。巨人の正体は何だろうか？

スイーパーとかいう宇宙の掃除屋？

それを聞くべき存在は既に頭を亡くしていた。

おれたちは誰も、疑問一つ口にしない。

誰も、身じろぎ一つしない。

ただ、黙って巨人を見上げていた。

しかし巨人はそんなことはお構いなしに行動を開始する。

緩慢な動作で右腕を大きく振りかぶり、マザー・シップ目掛けて振り下ろした。

再び、轟音。

マザー・シップは黒煙を上げ、曇天に細かい部品を舞い散ら

せながら更に大きく傾く。

「よっしゃ！　いくでえっ！」

まるでそれが合図だったかのように、丈が気合を声に出し射手谷を抱えて駆け出した。

その姿を見て、柿原が宮田を背負い、後に続く。

「月野っ！」

そしておれも。

月野の手を取り、三人の後を追う。

目指すは階下。スウィート・ゼリーからの脱出だった。

階段を駆け降り、受け付けを通り過ぎると、薄曇りの空の下に出た。

急いで降りたのに丈たちの姿は既に見えない。

空からは銀、白、黒色をした無数の破片が降っている。

それはいわずもがな、マザー・シップが撒き散らす装甲の一部である。

次いで、また轟音。

もはやオレンジを乗せたUFOが墜落するのは時間の問題だ。おれたちが戦ってきた外敵は、おれたち以外のヨソモノの手によって駆逐されるのだ。

あの巨大な船が墜ちたら、どれだけの被害が出るのだろう。

想像も付かない。

しかし、町は静寂そのものだった。

悲鳴一つ聞こえない。

それはこの町にまともな存在が皆無であることを、暗に告げていた。

皆、寄生されちまつてたつてことだ。

おれたちがやってきたことつて、何だったんだろう？

落ちてゆくおれの気持ちは、低く響くエンジン音に打ち消された。

そいつは銀色のメタリック・ボディを光らせて、スウィート・ゼリーの裏手から現れた。

車だ。

大人が六人乗れそうな大型車。

ラージ・ミニバンとかいうヤツだ。

ミニバンはブレーキ音と共に停車、舗装の崩れたアスファルトから土煙が上がった。

窓がゆっくりと降り、そこにあったのは丈の姿。

その隣には射手谷。

後部座席——は窓にウィンドフィルムが貼られていることもあり、姿までは見えないものの、そのシルエツトから柿原と宮田がいるのだろう。

「丈、射手谷」

「ボクらは……行く」

「おれの呼び掛けは丈の宣言によってかき消された。」

「行くつて、お前ら」

それは冗談みたいなハナシ。

「ボクらはあの黒いデカブツの近くまで行って、奇襲をかけようと思う」

「マジで言ってるのか……気でも狂ったのかよっ!!」

これは正気じゃないヤツらのハナシ。

「そやな。確かに、狂っとるんかもしれん」

そう言ってるのはニヤリと笑った。

それは自嘲？ 嘲笑？ それとも……。

「射手谷！ 降りろよっ！ 一緒に逃げようっ！ 危ないから、さあっ！」

おれは叫びながら手を差し出す。

でもその手は、助手席の彼女に届くことなく止まってしまふ。

その顔を、見てしまったから。

射手谷は、笑っていた。

返り血を浴びた血濡れの顔で、それはそれは安らかな微笑を浮かべていた。

「圭くん」

彼女は言う。

「ありがとう。気持ちは嬉しいわ。でもね。私たちは、行かないやならないの」

「どうして？」

「モチロン、地球を守るためによ」

「誰から!？」

「あの黒くて大きな巨人から」

「あれは、だって敵じゃないんだろ!!」

「ううん、敵よ。敵なの。未知なる敵。私たちにとっての、打ち倒すべき敵。悪。邪悪な侵略者」

射手谷は淀みなく言う「と再度、繰り返した。」

「だから、私たちは、行かないやならないの」

「そんな」

力なく腕を降ろし、運転席の丈に再び視線を向ける。

丈は尚も笑みを浮かべていたが、その笑いは射手谷のそれとは別物だった。

「丈、これでいいのか？ お前らは、これでいいのかよっ!!」

「ええんや」

溜め息をつくみたいに笑った後、丈は言った。

「ボクらはこれでええ。皆、納得済みや。これが、チーム・クリオンの生き様なんや」

これは、そんな人間のハナシ。

「くだらねえ。くだらねえよ」

全てを否定したくて頭を振る。

そつと冷たい指が、おれの手の甲に触れた。

視線を旋回させると、月野がおれの手を握りながら、黙つて見つめていた。

「ほな、ボクらは行くわ」

丈の言葉を含図に、車窓が心持ち早く閉まっていく。

「待って」

と、射手谷が窓の上昇を遮る。

ぐいと身を乗り出すと、射手谷はおれに向かって言った。

「ところで圭くん、ねえ、思い出した？」

「は？」

何のことだろう。

数瞬、沈黙して彼女は諦めたように首を傾げ「ううん。いい

の」だけ言った。

そして窓が上昇を再開する。

アイドリングしていたミニバンが、一際大きなエンジン音と共にゆっくり動き出す。

通り過ぎ様に丈が口を動かしたが、おれに意味までは読み取れなかった。

道路の上を滑るように走り出すミニバンの後姿を見ながら、おれの頭にさっきの質問がリフレインする。

ところで、ねえ、思い出した？

「あ」

思わず声が出ていた。

思い出した。

あの、射手谷と六年ぶりに再会した夜。

去り際に、彼女が出した問題。

圭くんは昔、あたしのこと何て呼んでたでしょう？

そうだった。

次、生きて会えたら教えてあげるよ！

射手谷の嘘つき。最後に教えてくれたっていいだろうっ！

でも、でもな。おれは、思い出したぜ。射手谷のアダ名！

おれは駆けた。

追いつくわけがない。でも止まるわけにはいかない。

小さくなりつつあるミニバン目掛けて、駆けて、叫んだ。

「まっちゃん！！」

瞬間、一筋の閃光が曇り空を貫いた。

それは灼熱の業火の如き光の柱。

直撃を受けたミニバンは、まるで大蛇に呑まれたように、後には何も、残らなかった。

Part VI

ベイベー・ベイベー

1

轟音が、耳を、劈いた。

閃光が、瞳を、貫いた。

振動が、身体を、揺さぶった。

おれは何も聞こえず、見えず、どちらが前か後ろかも分らない状態でよろめき、倒れた。

土と、割れたアスファルトの冷たい感触。

何が起きた？

チーム・クラリオンを乗せたミニバンが、遠ざかっていった、突然、消えた。

いや、それは正確ではない。

吹き飛んだんだ！！

シルバー・メタリックに輝く車体が粉々になって、光の柱の中で消滅した。

あれは何だったんだ？

しつかりしろ！ 目を開けろ！ 耳を澄ませ！ 見なきや！
聞かなきやダメだ！

おれは閃光に射られてきつく瞑っていた両目を開けて、緩慢な動作で起き上がった。

徐々に平衡感覚は取り戻され、視界も開けていく。

耳の中の残響も治まっていく。

そして、それを、見た。

傾いたマザー・シップの向こう。

巨大な漆黒の巨人を。

その瞳と思しき頭部の光が、燦って揺れていた。

僅かな黒煙も上がっている。

あいつだ。あいつが、やったんだ。

丈を、柿原を、宮田を、そしてまうちやんを、殺した。

視線を落とすと五十メートルほど先からの空間が、まるで始めからそうだったかのように消えていた。地面は抉れ、電柱や、民家や壁も、何もない。

あの光の柱が突き立った空間が、無に帰していた。

「うああああああっ！！」

意識せずとも、おれの口からは絶叫がほとばしる。

逃げなきや！

おれも殺される！

パチン

軽い衝撃が顔の右側に走り、我に返って前を見ると、月野が立っていた。

おれは、今、頬を打たれたらしい。

痛みはないが、右の頬が熱をもつてじんじんと痺れたようになっっている。

「山形くん」

「つ、月野」

「行くわよ」

そう言うや否や月野はおれの手を取って走り出した。

巨人に背を向けて、ラブホの駐車場を駆け抜ける。

破けたフェンスを瞬く間に乗り越えて、住宅街へ向け、更にダッシュ。

「どこ行くんだっ!?!」

間の抜けたおれの問いに、クレイジー・ガールは無表情に答えた。

「私の家よ」

「私の家よ」

と、月野は確かに言った。

月野の家。そういえば彼女はどこに住んでいるのか。不思議なことにおれはまるで知らなかった。おそらく確も同じだろう。

行動を共にするようになってから三ヶ月あまり、お互いの住所も教え合わないなんておかしい話かもしれないが、そんなこと、話題にすら登らなかつたのだ。

「月野、きみ、家って、どこ、だっけ?」

息を弾ませながら訊く。

「説明している暇は、ないわ」

至極当然の答えが返ってきて、おれは口を噤む。

町は、相変わらず奇妙な静寂に包まれていた。

「越えるわよ」

ほとんど聞き取れないような声量で月野が呟く。

「え?」

道は、平坦なアスファルトである。

しかし数メートル先からが、明らかにおかしかった。

何がおかしいのか、説明はし辛い。

だけど、視覚ではなく「感覚」に訴えかけてくる「おかしさ」があった。

その違和感との距離は一瞬で詰まり、おれは少しの恐怖心を抱きながら突入する。

バリン

何か割れたような音を全身で感じ、次の瞬間、おれの目に映り耳に聞こえるものが全てが変化した。

それは、逃げ惑う人々の洪水だった。

「なな？」

おれは思わず頬を引き攣らせる。

さっきまで確かにシンと静まり返っていたはずの町。

皆、オレンジにやられてしまっていたと思い込んでいた、なのに。

「『縄張り』を抜けたのよ」

月野の発する言葉は人々の悲鳴に混じりつつも、辛うじて聞き取ることが出来た。

「分かるでしょ？」

そう、分かっていた。

疑問符が口から飛び出す前に、おれは何がどうなったのかなんとなく理解していた。

オレンジは攻撃を行なう際、周囲に「境界」のようなものを張る。

ターゲット以外の人間を近寄らせない為だ。

それはこれまでの経験で説明されなくとも肌で知っていたことだ。

思えば目覚まし時計の止まっていた朝から、おれはヤツらの

「縄張り」の中に居たのだ。

その次は学校裏で、その次はラブホで、今日はどこまでもヤツらの監視下にあった気がする。

おれたちは人の海を逃れ、裏道ばかりを縫って走った。

走って走って、ただひたすらに走った。

いい加減肺が破れそうになってきた時、月野が

「着いたわ」

と言った。

半ば目を瞑っていたおれは、顔を上げてはつきりと見た。

月野が家と呼ぶ場所。

それはゴーストハウスと化した町外れのアパート跡——つまり、「廃屋」だった。

3

「ここに住んでたのか？」

呆然としつつも訊くと、月野はとつと歩き出した。

つくづく、オカシナ娘だとおれは改めて思った。

学園のマドンナにして奇行の数々で奇異の視線を一手に集める変人。

しかもお住まいは廃屋なのだ。

こりやおモシロイ。

笑えないけど、オモシロイ。

二階建てのボロアパートは錆びた手すりや階段が今にも崩れ落ちそうなほどに劣化していた。

ミシミシ軋む鉄板を踏みしめて、やや早足で進む。

二階の突き当たりまで行つて、月野はおもむろにドアへと向き直つた。

表札は、ない。

錆びに侵食されつつあるドアノブを掴み、乱暴に回す。

鍵は、もちろん掛かつていない。

ギギギと蝶番が嫌な音を立てて、ドアが開く。

中に入る時、一応女子の部屋なのだからと小さく

「お邪魔します」

と呟いた自分自身が滑稽だった。

室内は、驚くほどに簡素だった。

ワンルームで、広さは六畳ほど。

キッチンやトイレはあるみたいだが、機能はしていないだろう。

フローリングや壁紙も剥げかけており、全体的に埃っぽい。

窓は壁際に一枚だけ、上半身を乗り出せるだけの大きさのヤツが、唯一の光源として存在していた。

そんな部屋の片隅に、一枚の寝袋。

中央に、折り畳み式の白いテーブル。

テーブルの上に、学校で使う教科書の類が積まれていた。

それだけが、そこに誰かが居るといふ痕跡だった。

「月野、オマエって……」

「何者なんだ」

その問いを喉の裏に張り付かせて、無理やり飲み込んだ。

今まで何度となく浮かんでは消えてきた最大の疑問。

月野真琴は何者なのか？

人間なのか、それとも……

その疑問が、恐怖心を伴って全身を駆け巡つた。

レイキュライ、オレンジ、クラリオン、アブダクション、インプラント……

そして全ての非日常の、根源。

月野。

「ううっ」

おれは呻いて一步、後じさる。

「山形くん」

そんなおれを寸でのところで押し留めたのは他でもない、恐怖の対象である月野だった。

彼女は足早で部屋の隅に歩みを進めると、寝袋のジッパーを

下げて、心持ち面積を広げた。

「こっち、来て」

寝袋の上に腰を下ろして、おれを手招きする。

そうなると、おれはもう行かざるを得ない。

月野はいつも通りの制服姿で、無防備に膝を立てて座っている。

スカートの半ばめくれ、両足の隙間から白いものがちらちら見える。

しかもその大きな瞳は、熱っぽく潤んでいるのだ。

そんな状態で手招きされれば、男なら誰だって落ちる。

例え非常時であつても、問題ではない。

気が付くとおれは月野の隣へ座り込んでいた。

恐るべきエロ……いや、月野真琴の魔性が成せる業だつた。

「な、何だよ」

「服脱いで」

そのワードは、聞き逃すにはあまりに刺激的だつた。

「え？」

何度か目を瞬かせ、上ずつた声で返す。

「早く」

「え、でも」

「いいから早くっ」

困惑するおれをよそに、月野は浴びた帰り血が乾きかけて多
少ゴワついた紺色のブレザーに手を掛ける。

「ちよちよっ、じ、自分でやるからっ」

女の子に脱がされるくらいなら、と訳が分からないまま自分で
ブレザーのボタンを外し、

ネクタイを緩め、更にYシャツのボタンも外す。

そして下着のシャツも含め、ためらいながら全部、脱ぎ捨てた。

薄く、頼りない胸板が露になる。

十二月なのに、不思議と寒くはなかった。

月野はそんなおれの上半身を、じつくりと舐めるように見つけていた。

「ぬ、脱いだぞ、どうする、気だよ」

無自覚に強張る身体に、月野の細く、繊細な指が触れる。

思わず声が漏れそうになった。

まるで全身の触覚という触覚が月野の指に支配されているよ
うな、恐怖と恍惚の入り混じつた奇妙な感覚。

更に指は腕から這い上がって、肩へ、肩から下つて胸へ、そ
こで乳首の周りで円を描いて再度、這い上がり、あのT字型の

傷痕へと至る。

月野の頬には朱が刺していた。

息使いもどこか荒い。

気が付くと、おれも似たような状態になっていた。

自慰の最中に生じると同じ、性的な興奮状態。

月野は覗き込むような上目使いでおれを見ている。

その顔が急に近くなり、その小さな口がおれの唇をすれすれ
で掠めて、横に逸れる。

次いで、首筋にヌルリとした感触。

それが彼女の舌であるとするのに、時間は掛からなかった。

月野は、荒い息を吐き出すのと同時に、舌を這わせる。首筋から鎖骨へ、更に下って乳首を転がし、再度上昇し、傷痕を舐める。

そこで留まって、あのインプラント痕を、激しく愛撫した。

「うっ、ふっ、あっ」

自然と声が漏れる。

突然始まったいくつかの夢の続きに、おれは戸惑いながらも月野を抱き締めようと両手を広げる。

しかし、月野はおれが手を触れる前に顔を上げた。

そして唾液にまみれた口元を拭いもせず

「見て」

と言い、右手を挙げた。

その人差し指の先——おれと同じだが小さい丁字型のインプラント痕が赤くなり、湿っていた。

「こんなに濡れてるの」

どうして欲しいのか、言われずとも分かった。

「あなたの番よ。＃圭くん」

まぐちゃんが使っていた愛称で呼ばれ一瞬、熱が冷めるが、すぐに快楽の渦に身を委ねる。

おれは月野の指を口に含むと、舌で舐めまわした。

「ん、ああっ」

時に先端を舌先でつつくように、または奥歯で甘噛みして可愛がる。

「あうっ、んん」

その度に月野は身をよじって喘いだ。

唇から漏れる甘ったるい声に、おれはますます興奮し、ほとんど喉奥にまで指を突っ込ませて愛撫した。

極限に興奮してはいたが、不思議なことに勃起はしなかった。

まるでおれの男性器が、股間から消え、左胸の傷痕に移動したかのようだった。

そう、あのインプラント痕だけは、熱を持ってどくどく脈打っていたのである。

それは心臓の音というには、あまりに肉感的な脈動だった。

不意に月野がおれの口から指を引き抜いた。

「もう、いいわ」

と言って唾液に濡れた指をおれに向けた。

先端が赤くなり、少し傷口が開いているように見える。

「準備は出来たわよ」

そう言って月野が再度近づく。激しく身悶えしたからだろう、彼女の制服は胸元が大きくはだけ、白いブラがはつきりと確認出来た。

しかしおれはそのことよりも、月野の右手人差し指が濡れて赤くなっていることに、性的な興奮を感じていた。

「っ、ひの、りゅんびって……？」

口を使い過ぎて上手く呂律が回らない。

「いいのよ。私に任せて」

言いながら月野は再び指を身体に這わす。

そして傷痕の上でびたりと止めた。

「見てよ、圭くんたら。こんなに『欲しがってる』」

おれは月野の言う通りに、見た。

自分のインプラント痕を。

「うあつ」

思わず悲鳴に似た声が出た。おれのT字型の傷痕は、赤みを帯び脈打ちながらパツクリと開いていた。

内壁の肉の赤が、紅潮した皮膚のそれとは異なる色を晒している。

「大丈夫よ。痛いのは最初だけ、優しくするから、ね？」

目の前で小首を傾げながら囁くのは、少女にあるまじき台詞だった。

これじゃあ、まるで、『逆』じゃないかつ。

頭は強烈な違和感を訴えているのだが、身体がいうことを利かない。

月野はまるで焦らすようにゆつくりと、少し反り上がって屹立した人差し指を近づけてくる。

やがてそれはおれの開いた傷口にぎちぎち音を立てながら押し込まれてゆく。

「ぎああつ」

思わず激痛に顔が歪む。

痛い。耐え難い痛みが襲う。

それと同時にある疑問が脳みそを錯綜する。

『これで童貞卒業なのか？』

『それとも……処女喪失？』

果てしなくくだらないクエスチョン。

当然ながら答えは出ない。

そうだ。どちらとも言えるし、どちらとも言えないじゃないか。

つーより何より痛ってえなああああつククショーツ程なくして指の付け根まで挿入されると

「動かすわよ」

という月野の声を合図に、ゆつくりとピストン運動が始まる。これがまた痛い。

「あぐつ。あぎつ。うぐつ。ぎいつ。ひうつ」

情けない声が口から零れ、とてつもなくかつこ悪い気がして泣きたくなる。

不意に運動が止んで、月野が空いている左手でおれの後頭部を抱き込んだ。

ほのかに汗とボディソープの混ざったような香りが鼻腔をくすぐる。

彼女はおれの耳元に口を寄せ、熱い吐息と共に囁きかける。

「大丈夫。安心して。すぐに……キモチよくなるから」

直後にまた腕を解いて、ピストンを再開する。

この月野の囁きは、まるで麻酔みたいにおれの痛覚を鈍くし

た。

そして激痛は鈍痛に、鈍痛は快樂へと徐々にシフトしていく。その過程を、おれはまるで他人事みたいに、どこか冷静に確認していた。

キモチよくなるにつれ、月野の指の抜き差しは、いやらしい音と共に加速していった。

ぐぼっ

ぬちゅっ

じゅぼっ

ぎちゅっ

おれの左胸は、何やら分からない体液でぬらぬら光っている。

ぐちゅっ

くちゅっ

ぬちゅっ

おれの口からは、我ながら気色悪い艶っぽい喘ぎ声が、絶え間なく漏れている。

その間、おれの視線は月野に釘付けになっていた。

それというのも彼女自身が、抗い難い快樂に全身を軋ませていたからだ。

月野の恍惚に満ちた顔を見て、おれは思わずお気に入りの中のA女優・濤井ちひろのよがる姿を重ね合わせた。

やはり二人はよく似た顔をするんだなあと、妙に笑えた。ピストンの激しさからいって、終わりは近いのだろうと思っ



た。

最も、SEXの基準で考えていいかは微妙なところだったが。

しかしおれの予想は当たっていたらしく、月野は身を乗り出して全身で指を使っているし、おれもナニカが絶頂に達するのを理解していた。

そして遂に――。

「んはあああああつっつ」

という月野の絶叫をもって、行為は終わった。

おれはというと呻きながら、左胸に熱い液体が流れ込むのを感じていた。

まさか精液ではないのだろうか、何であるかを月野に訊く余裕はなかった。

指が傷痕から引き抜かれ、お互い崩れ落ちるようにして床に転がる。

下に敷いていたはずの寝袋はあらぬ方向によじれていた。

共にしばらく何も言う事ができず、ただ荒い呼吸の音だけが、場を支配していた。

おれは、月野とやったんだ。

違うか？

違うよな。やっぱ。

それでもこれは明らかに特別な「行為」で。

おれは選ばれたことでいいんだろうか。

何か切羽詰って感じもするけど。

どうなんだ？

月野。

彼女はおれの斜め下にいる。

生つちろい足が見える。

呼吸に上下する肩が見える。胸が見える。

嗚呼、月野。

おれは今、とてつもなく君を愛おしく思う。

もう、怖いなんて塵ほども思わない。

君のためなら何でもする。出来る。

『街はイルミネーション

君はイリユージョン

天使のような微笑み』

不意に、聞き覚えのある曲が部屋の外から、ドアの隙間から漏れ聞こえてきた。

『君を想うだけで

胸が苦しくて

消えて無くなりそうだ』

この曲は――「ベイビー・ベイビー」だ。

歌っているのはゴーイング・ステディというパンクロックバンド。

やかましいギターとやかましいヴォーカルが印象的なバンドの曲の中でも、メロディアスで耳馴染みのいい、そして歌詞のこつ恥ずかしい名曲だった。

『永遠に』

生きられるだろうか』

おれはこの曲の入ったCDを持っていたことを思い出していた。
た。

そしてそのCDの現在の在り処も。

貸したのだ——音楽に疎い親友に。

『永遠に』

君のために』

その友人の名は——。

「来ると思ってたわ」

身を起こした月野が呟くのと、曲がサビに入ると、ソイツ

がドアを蹴破るのはほぼ同時だった。

「碓——」

「碓くん」

『ベイビー・ベイビー』

ベイビー・ベイビー

君を抱き締めていたい

何もかもが

輝いて

手を振って

ベイビー・ベイビー

ベイビー・ベイビー

抱き締めておくれ

かけがえの無い愛しいひとよ』

ラブホ以来、再びおれたちの前に立った碓貞美は、あの場所で見せられた幻覚のように崩れた外見をしてはいなかった。むしろその美しさに、更なる妖艶さを加えた佇まいで、彼はこちらを無感動に見つめていた。

曲は彼の、血に染まったカーキ色のブルゾンの中から聞えていた。

おそらくイヤホンを抜いたCDプレイヤーが入っているのだろう。

やがて碓の口元に微笑が浮かぶ頃、激しい揺れと轟音がおれたちに襲いかかった。

遂にマザー・シップが落ちたのだ。

しかしそんなことに気が向く暇もなく、目の前には碓の顔が迫り。

次の瞬間、おれは全身に衝撃を受け、窓を突き破って外へと吹き飛ばされた。

それが、親友との開戦の合図だった。

(つづく)